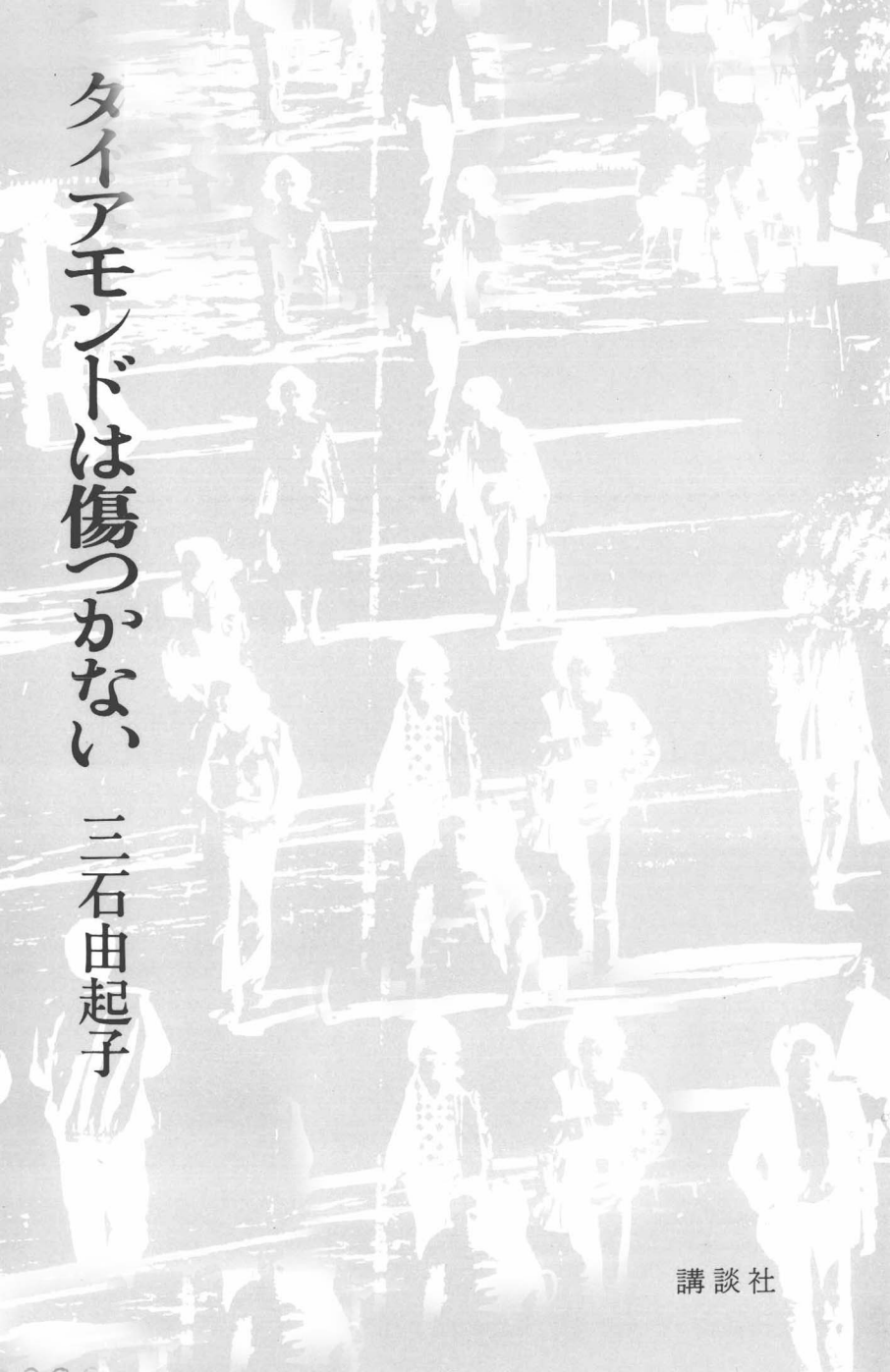


三石由起子

ダイヤモンドは傷つかない





ダイヤモンドは傷つかない

三石由起子

講談社

ダイヤモンドは傷つかない

昭和五十六年五月二十日 第一刷発行

著者 三石由起子

発行者 野間惟道

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号一二二

電話東京(〇三)九四五―二二二(代表)／振替東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価 七八〇円



落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

© Yukiko Mitsunishi 1981, Printed in Japan

三石由起子 (みついし ゆきこ)

昭和二十九年六月、長野県飯田市生れ。

昭和四十八年三月、飯田風越高校卒業。

昭和四十九年四月、早稲田大学第一文学

部入学。米国ウエスト・フロリダ大学留

学の期間を経て、昭和五十六年三月、早

大東洋哲学科卒業。本名・浜田由起子。

ダイヤモンドは傷つかない

装帧
辻村益朗

予備校の廊下で三村とすれ違って、弓子は一瞬別れ難い思いにとらわれた。きょう彼の授業がなかったせいばかりではない。

「おい、あんたか。一学期は、黒板に書く労力がかなり省けて助かったよ。また、頼むぞ」

こんな言葉で、すっかり嬉しくなっている弓子は十八歳で、一浪は「ひとなみ」と読むんだと言われる予備校生である。

「先生、今からみんなでちょっと出るんですが、いらっしやいませんか？」

「俺は左の方だよ。もう、子供とお茶を飲む時間じゃない。きょうは学期初めの顔合わせだからな。駅前ビルの二階だ」

弓子は友人と別れて、慣れぬ場所にこのこと出かけて来た。それはまるで仲間を誘いでもするかのような口調で、三村があっさりと場所を口にしたためであった。

彼女が、五十五歳になる古文の講師を気にし始めたのは、第一回の週間試験が返却されて来た時のことだろう。面倒臭そうな表情を隠そうともせず、しばらく弓子の抗議を聞きながしていた三村は、

「それだけ解っているんなら、『先生は、お疲れか』と、笑ってすますところだよ。

二点や三点の採点ミスじゃないか」

と、言ったものだ。

夏も、もう終わろうとしていた。

戸口につつ立ったままにいる弓子を見つけて、三村が声をかける。

「ほら。天婦羅が来た。これを食べてお帰り。餓鬼が長くいる所じゃないよ」

英語の中山が笑った。

「君、特待生なんだってねえ。事務長から聞いたよ。一杯くらいは構わんだろう。ちょっと飲んでいきなさい」

「こっちにお坐りなさい」

漢文の馬場が言った。その確かな声に引かれるようにして、弓子は小部屋に上がり込んだ。

秋田県の旧家を壊して、そのまま運んで来たという戸板で囲まれたその部屋は、三畳程の大きさだったろうか。文机のように小さなテーブルを中にして坐ると、四人の小さな世界ができた。

今、飲み屋で見る三村は新鮮だった。人なつっこい笑顔が、一層崩れている。

「——まあ、飲めよ。みんなのお許しが出たんだから。……この子はね、俺の助手みたいなもんでね。授業が始まる前にテキストの答えを、みんな黒板に書いてちょうんだよ」

言いながら、空いていた自分のグラスにビールを注いで弓子にさし出す。

「……しかし、近頃は浪人も変わったなあ。一昔前までは矢尽き、刀折れという雰囲気でとても酒なんか一緒に飲まなかった」

「三村さん、そろそろ酒の方がいいですか？ ……僕もそう思いますよ。この間もね、一番前に坐ってる子が堂々と手をつないでいるんですよ。あれは、右にいる男の方はいいだろうが、左側の女の子はきき手をとられちゃってるわけですからね。ノートもとれないんじゃないかって、教えるこっちが心配になります」

と、英語の中山は、三村と弓子を交互に見て笑う。三村はテーブルの下から、弓子の腕をとらえていた。この道一筋二十年以上にもなる予備校のプロである。

「まったくな。……しかしナカさんよ、予備校っていうところは五年以上勤めちゃいかんよ。若いうちに先生、先生、ってよばれるのは、あんまりタメにならないなあ。第一、ペイが良すぎる」

三村の動作は自然だった。彼はもう弓子の肘のあたりをつかまえていたが、表情にも何ら変化はうかがえない。

弓子も当たり前のことのように、握られるままになっている。五十五歳にもなれば、こんなことなど何でもないに違いなかった。

漢文の教師は苦笑しながら、手酌で盃をおおると、横向きのまま弓子にきいた。

「君はいつも子分みたいなのをソロソロ連れて歩いていきますね。あの中に好きな子でもいるんですか？」

「いいえ。……ジョン・ヘイ宣言を発していますから……」

「え？」

「門戸開放、機会均等、領土保全、です」

「ハハハ。いいね」

三村は握った手をそのままにして放そうとはせず、あいた方の手で酒を飲んでいる。

「おまえねえ、機会均等って意味を本当に知ってるか？ 機会均等っていうのはだね、あっちに寄り、俺が一番愛されているんだと思わせ、次にこっちに寄り、僕のことを最高に好きなんだと信じさせ、今度は又、別の方に行ってだね、そうやって全ての者にみんなそう信じさせて、しかも結果として機会均等であるという状態をいうんだよ。おまえのように、それが機会均等なんだと全部に悟らせちゃうのは、まだ政治的手腕が足らんね」

「アハハ。……君、あんまり三村さんの講義を受けない方がいいですよ」

弓子は右手を三村にあずけながら、この「自然」な格好を、子供っぽいぎこちなさで乱したくないと思っていた。そこで、ごく自然に見えるように、左手で自分の盃を満たしてみた。十八の娘にはなかなかむずかしい業だった。ぐい呑みは、高さはあるが直径は小さく、徳利は二合徳利である。

「君、ずいぶん飲めますね」

漢文の馬場が、そんな言葉でストップをかけた。もうとうに天婦羅はない。

「俺、彼女を送ってやるよ」

三村は立ち上がり際、もう一度弓子の手を込めて、握り直した。

教え子の酔いを心配する口ぶりで喫茶店に誘った彼は、エレベーターの止まる瞬間に、ちよつとよろめいた。

「どうして食わないの？ 甘すぎるの？」

三村は眉間に皺を寄せる。自分のスプーンと一緒に食べかけの宇治金時を押して寄こしながら、これもスプーンと一緒に弓子のイチゴミルクを取り上げてしまっていた。弓子のスプーンを使って悠然と平らげる。

弓子はドキドキしながら、ニッコリ笑った三村の顔を見つめ、中学の時に好きだった音楽の先生のことを思い出していた。音楽の時間、毎回前から二、三列めの席を確保するのに腐心していたあの頃。一度、最前列に坐った時、ちよつと先生に貸した鉛

筆は、弓子の宝物になった。高校に入ってから、初めて先生の家に遊びに出かけ、一時間ほど話をした。その日、先生の唇に触れたキャメルの紙を家に持ち帰り、丁寧に皺をのばして日記帳にはりつけたっけ。

そんな初恋時代は、もう終わってしまったのだろうか。

三村のスプーンが目の前にあった。顔中カッカと熱くなりながら、弓子は平気な顔でそれを口中に含んでみた。熱い氷だった。

（女学生じゃあるまいし……こんなことは何でもないんだ）

と、女学生の弓子は考える。

「先生は、あまりお強くないんですね」

「酒にか？ ……そうだな。弱くなったかもしれないな」

何か言わなければならないように思う。こんなチャンスは又とはあるまい。この時間でも長くすることを弓子は考えなければならなかった。

「俺は女には強い」

「え？」

「俺は女の心を動かすのがうまい」

「へえ」

「男の中にはね、女を自分の傘に入れてやりたい奴と、女の傘の中に自分が入りたい奴と二通りあってね。……入れてやるのと入れてもらうのとじゃあ、入れてもらう方がむずかしいんだよ。……わかるか？」

「わかるような気がします」

「はるかにむずかしい」

「それで、入りたい方なんですか？　先生は……」

「……俺の女を見せてやろうか？」

酔った勢いと幼稚な好奇心が混り合った。

駅で自動販売機の前に立った時、弓子のために切符を買おうとする手をちょっと止めて、初めて三村はためらいを見せた。

「少し、遠いぞ」

「はい」

「いいか？」

「はい」

「うん、そうか」

「あの、先生の切符は？」

「俺は定期がある」

赤い快速電車が各駅に停まるようになってからも、まだかなりの道のりがあった。目の前のつり皮に掴まったジーパン姿の男の子たちが、弓子にはいかにも子供供しに見える。不思議だった。

「俺が酔っちゃったんで連れて来ました。おうちじゃなかったんですかって、とぼけていろよ」

「おうちじゃなかったんですか、なんてへんですよ」

「ああ、そうか」

駅からはすぐだった。ビルの階段を二人は黙って上って行った。それは何階建ての建物だったのだろう。気がつくと、屋上に出てしまっている。

「口止めだ」

三村はいきなり弓子を抱きしめると唇を重ねた。腹を立てる暇も与えないほど、それは突然の事件だった。

「馬鹿め」

と、三村は低く言った。

「キスもしたことがなかったのか、あきれた奴だな」

弓子には、どう反応したらいいのか見当もつかなかった。このままさっさと帰ることもできる。しかし、もっとおとなのふりをして中途半端な好奇心を満足させてみたいと思う。

「吸ってごらん。男の唾液が入るだろう？」

「……………」

汚らしい言葉が、弓子の全人格を否定していた。

いい風が吹いている。駅の光がよく見えた。弓子は、そのまま彼の顔を避けて、この場所を確認するように電車線路の方向を見つめた。

「おい、……お前も気が強いな」

「どうして？」

「何のジェスチュアだ!？」

「ここ、どのあたりかなと思って……」